良いぶどう酒を
用意していてくださるイエス

ヨハネ２：１－１１

司祭　ヨハネ 井田　泉

2019 年 1 月 20 日
顕現後第 2 主日

奈良基督教会にて

イエスさまが公に活動を開始された初期のころのことです。ガリラヤのカナという町で結婚式がありました。カナはイエスさまの故郷ナザレから北へ 6 キロメートルくらいのところにある村で、カナとナザレとの間には頻繁な往来・交流があったでしょう。それでイエスの母マリアは、その婚礼に出席していました。

当時の結婚式は村中のお祝いで、結婚の礼拝の後は何日もお祝いの宴が続いたそうです。大勢の人びとが集まっています。ここに

「イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。」ヨハネ 2:2

と記されています。結婚する二人も、その家族も、イエスを招いた。イエスにぜひとも来てほしかった。イエスが来てくださるのとそうでないのとでは全然違うのです。今回、結婚式をイエスが司式するわけではないにしても、イエスに臨席してほしい、二人を祝福してほしい。

ここでふと思います。わたしたちが集まるときにも、そこにイエスさまに来てほしい。この礼拝にも必ずイエスさまに臨席していてほしい。そう願うのでわたしたちはこの礼拝を「主イエス・キリストよ、おいでください」という祈りで始めたのです。

礼拝はもちろん、あらゆる人の集まりにおいて、目には見えずともイエスさまに来てほしい、いてほしい。願わくはそのような思いと祈りを、皆さんもともにしてほしいと思います。

さてカナの婚礼の話に戻ります。婚礼の宴の何日目でしょうか。ぶどう酒の減り方が激しい。予想した人数よりはるかに出席者が多かったか、大酒飲みがたくさんいるのか。マリアは非常に心配してイエスに**「ぶどう酒がなくなりました」**と言いました。婚礼にはぶどう酒は欠かせないものでした。それに対するイエスの答は何か冷淡に聞こえます。

「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」ヨハネ 2:4

けれどもマリアは召し使いたちに「イエスが何か言ったら、何でもそのとおりにしてくださいね」と頼みました。

そこにはユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてありました。1 メートルくらいの高さの大きなものです。でもみな空っぽです。手を清めることを通して心を清める、という習慣また精神が、もう失われていた、ということでしょうか。

イエスは召し使いたちに、この水がめに水をいっぱい入れてほしい、頼みます。召し使いたちは言われたとおりに瓶の縁まで水を満たしました。

イエスはこのときどんな口調で召し使いたちに声をかけたのでしょうか。召し使いたちはどんな気持ちで言われたことを実行したのでしょうか。何も書いてはありません。しかしわたしは、ここにイエスと召し使いたちの心のふれ合い、交流が起こっていると想像したいのです。イエスの願いは、神さまの前に

一緒に生きて行くことを誓った二人を祝福することです。また二人のために祈り、祝うために集まった人びとを祝福し、喜びを共にすることです。そのイエスの祈りと思いが、召し使いたちにも伝わった。

理屈で考えれば、なぜこんなことをしなければならないのかわかりません。けれどもイエスと同じ思いになった召し使いたちは、真心をこめて、水を汲んできます。庭に井戸があったとして、何度も何度も往復して六つの水がめを満たしていくのです。機械的やっているのではありません。イエスの思いに動かれされて、心をこめて重い水を運んでは水がめに入れます。

「イエスが、『水がめに水をいっぱい入れなさい』と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。」2:7

「かめの縁まで水を満たした」というところに、彼らの熱心と真心があります。

すると

「イエスは、『さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい』と言われた。召し使いたちは運んで行った。」2:8

こんなことをして何になるのか、とは彼らは考えません。イエスが言われたことは特別大切なことなのです。水がめから汲んで、大切に運んでいきます。召し使いたちは脇役であり奉仕者ですから、運んで行ってそれを世話役のところに届けたら、そっと引き返してきます。

世話役は運ばれてきたものの味見をして非常に驚きました。こんなにおいしいぶどう酒は飲んだことがありません。世話役は花婿を呼んで言いました。

「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」2:10

そうは言われても花婿もどういうことかわかりません。

「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった」2:9

そうなのです。水をくんだ召し使いたちは知っていた。このぶどう酒はイエスの祈りと祝福から来たのです。そしてイエスに従って自分たちも精一杯真心をこめて働いたことが実を結んだのです。きっと召し使いたちは、イエスのところに戻って、この最上のおいしいぶどう酒を一緒に飲んで満ち足りたに違いありません。イエスのそばにいて、イエスとともに祈り働くこと。その結果与えられた思いがけないぶどう酒の恵み。これがイエスを信じて従う者に与えられる至福。最高の幸せです。おそらくイエスはこの召し使いたちをもはや召し使いとも僕とも呼ばれない。「わたしの友」と呼ばれるのです。祈りと苦労と喜びを共にする友人です。

母マリアの言葉に、イエスはすぐには期待するようには答えられませんでした。けれどもイエスはマリアの心配と求めを心

にとめておられて、やがて行動を開始されました。

「水がめに水をいっぱい入れなさい」

「さあ、さあ、それをくんで、持って行きなさい」

イエスがわたしたちに求め、託されることには、イエスの祈りと愛がこもっています。それをわたしたちは受けて、イエスの願いをわたしたちの真心をこめて行っていきます。そのわたしたちのためにイエスが用意していてくださるのは、良いぶどう酒、最高の祝福です。

そのしるし、また具体化として、今日この礼拝においてもイエスは良いぶどう酒を用意してわたしたちを迎えてくださるのです。

主イエスさま、あなたがカナの婚礼に来られたように、今、わたしたちのところに来てください。わたしたちを、あなたを信じて従う者にしてください。あなたと祈りと労苦を共にし、あなたから来る喜びと祝福を共に感謝して喜ぶ者にしてください。**アーメン**